Osaka University Knowledge Archive

Title	教育における「承認」の論理に関する社会学的研究ー外国にルーツをもつ子どもの学習支援教室と学校の連携を軸にー
Author(s)	瀬戸, 麗
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91898
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　瀬戸　麗　）	
論文題名	教育における「承認」の論理に関する社会学的研究 ―外国にルーツをもつ子どもの学習支援教室と学校の連携を軸に―

論文内容の要旨

本論文の目的は、教育をめぐる排除に対抗する「承認」のありようとその論理を明らかにすることである。近年、教育をめぐる排除に対して学校と学校外の専門機関や地域人材が連携して教育支援を行う必要性が提示されている一方で、学校と学校外アクターの非対称性等により社会経済的に厳しい状況にある子どもが後者からも排除されやすいことが指摘されている。そこで、排除が先鋭化している外国にルーツをもつ子どもを対象に、学校と学習支援教室の連携による教育支援のありようを検討することとした。その際、アクセル・ホネットの承認論を分析視角として、承認の愛・ケアの形式、法的関係の形式、連帯・業績の形式から、教育支援において立ち現れる「承認」の論理を論じることとした。

第一部では、学校と学習支援教室の組織連携について検討した。1章は学校の視点から、学校と地域の学習支援教室が非対称性を乗り越える連携を構築する過程で、教員による「教育保障」の捉え方が従来の学校教育の範囲を超えて変容し、外国にルーツをもつ子どもの生活背景や居場所の課題が認識されたことを指摘した。2章は学校と連携しながら学校外の地域にネットワークをつくる「ハブ」として位置づく、地域の学習支援教室の視点から、学習支援教室を中心に構築されたネットワークが、子どもを中心に時間的・空間的に広がりをもつケア・ネットワークと、行政へのアドボカシー機能を含んだイシュー・ネットワークの両面性を兼ね備えていったことを指摘した。

第二部では、学習支援教室の日常世界を子どもと支援者の相互作用に焦点を当てて描いた。3章は「学習時間」に焦点を当て、外国にルーツをもつ子どもと支援者の「学習」と「居場所」を兼ね備える関係性を明らかにした。そのような関係を構築する条件は、教育的関係にホネットの愛・ケアの形式における「承認」が位置づくことであり、そのような教育的関係は支援者と子どもの相互主観的な自律に支えられることを指摘した。4章は外国にルーツをもつ子どものエスニシティの立ち現われと承認に関する支援者と子どもの相互作用を、両者の非対称性に着目しながら明らかにした。学習支援教室は子ども同士がルートの違いを認識する場になっており、子どもの「声」により支援者の固定的なまなざしが修正される様子とその背景を検討した。

第三部では、学校と学習支援教室の連携による教育支援をめぐる各アクターの意味づけを検討した。外国にルーツをもつ若者の語りに焦点を当てた5章では、人生の初期段階に承認の毀損・不在を経験した子どもが、ハイブリッド志向型のアイデンティティを形成し、移行においてメリトクラティックな学校文化の価値観のみならず他の強みやトランスナショナルな志向性を有する様が見られた。承認される学習支援教室の場において、過去・現在・未来をつなぐ自己物語を紡ぐことが重要な意味づけをもって語られた。6章は支援者と教員の語りを対象に、学習支援教室との連携は学校内の承認の毀損に対応することにつながっていること、そして、支援者が若者との関係の中で教育を通じた将来の福祉の実現について捉え直し、新たな学力観を見出すようになったことを述べた。

終章では、教育をめぐる排除に対抗する「承認」の論理について論じた。法の次元で外国籍の子どもの教育権が保障されていない中で、教育政策では教育機会の平等の必要性が認知・実装化され始めた段階にある。学校教育実践では再配分と承認の二元論的な理解のもと前者に焦点が当たる傾向にあり、資源配分の際のカテゴリー化の問題や再配分領域における承認の視点の不足に至りやすい。一方、学習支援教室を起点とした外国にルーツをもつ子どもの「承認」はホネットの規範的一元論で捉えられるものであり、そうした課題を乗り越える可能性を有していた。学校や家庭で承認の毀損・不在を経験した外国にルーツをもつ子どもが、学習支援教室で子ども同士のケアや支援者との間に相互主観的な自律の関係を構築する中で（愛・ケアの形式）、他者化のまなざしを脱構築し言挙げする様が見られ（承認をめぐる闘争）、支援者もまた学校や行政に変容を促す主体となる（法的関係の形式）。そのような中で「学力」に対する問い直しが見られた（連帯・業績の形式）。「承認」の論理は、外国にルーツをもつ子どもの教育をめぐる排除に対して教育から／への自由を保障しようとするものであり、学習支援教室が学校教育制度に対して外部性と内部性を有する構造的位置によって可能となることを明らかにした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　瀬戸　麗　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	志水　宏吉
	副 査	教授	髙田　一宏
	副 査	教授	稲場　圭信

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、教育をめぐる排除に対抗する「承認」のありようとその論理を明らかにすることである。排除が先鋭化してきている外国にルーツをもつ子どもを対象に、学校と学習支援教室の連携による教育支援のありようを検討することとした。その際、ホネットの承認論を分析視角として、愛・ケアの形式、法的関係の形式、連帯・業績の形式の3次元から、教育支援において立ち現れる「承認」の論理を論じた。

第一部では、学校と学習支援教室の組織連携について検討した。1章では学校の視点から、学校と地域の学習支援教室が非対称性を乗り越える連携を構築する過程を描いた。2章では、地域の学習支援教室の視点から、そこを中心に構築されたネットワークが、ケア・ネットワークとイシュー・ネットワークの両面性を兼ね備えていることを指摘した。

第二部では、学習支援教室の日常世界について支援者と子どもの相互作用に焦点を当てて描いた。3章では「学習時間」に焦点を当て、外国にルーツをもつ子どもと支援者の「学習」と「居場所」を兼ね備える関係性を明らかにした。また4章では外国にルーツをもつ子どものエスニシティの立ち現われと承認に関する支援者と子どもの相互作用を、両者の非対称性に着目しながら明らかにした。

第三部では、学校と学習支援教室の連携による教育支援をめぐる各アクターの意味づけを検討した。若者の語りに焦点を当てた5章では、人生の初期段階に学校や家庭で

承認の毀損や不在を経験していた子どもがハイブリッド志向型のアイデンティティを形成していくプロセスを描き出した。さらに6章では、支援者と教師の語りを対象に、学習支援教室との連携は教師の意識変容を促し学校内の承認の毀損に対応することにつながっていることを示した。

終章では、教育をめぐる排除に対抗する「承認」の論理について論じた。学校や家庭で承認の毀損・不在を経験する外国にルーツをもつ子どもが、学習支援教室で受容され支援者との間に相互主観的な自律の関係を構築する中で（愛・ケアの形式）、外国にルーツをもつ子ども自身の言挙げが見られ（承認をめぐる闘争）、支援者もまた学校や行政に変容を促す主体となる（法的関係の形式）。そのような中で、「学力」に対する問い直しが見られた（連帯・業績の形式）。「承認」の論理は、外国にルーツをもつ子どもの「教育をめぐる排除」に対して「教育から／への自由」を保障しようとするものであり、学習支援教室が学校教育制度に対して外部性と内部性を有する構造的位置によって可能となることを明らかにした。

本論文が主題とする外国につながりをもつ子どもの教育支援というテーマは、グローバル化が進行した現代の日本社会ならではのものである。筆者が実践者としてかかわった教育現場における長期のフィールドワークによって得られた豊富な参与観察・聞き取りデータはきわめて貴重なものであり、ホネットの承認論を枠組みに展開されている分析もきわめて洞察にあふれたものとなっている。本論文が産出した知見は、従来の教育社会学的研究に大きな学問的貢献をもたらすと言いうる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。